2010年12月29日

はたらく女性のフロア通信　第7号

第55回第55回　はたらく女性の中央集会 in 横浜

いかそう憲法・核も基地もない世界に　なくそう貧困　つくろうジェンダー平等の社会を

第55回はたらく女性の中央集会が横浜市内を会場に11月20、21日開催されました。20日は鶴見会館を会場に全体会を開催。北海道から沖縄まで全国から1250人が参加、21日は横浜総合高校を会場に１１の分科会（移動分科会も含め）を開催し750人が参加しました。神奈川からは２日間で、1200名を超える参加者であった。中央実行委員会のもと神奈川県実行委員会を、神奈川労連・春闘共闘会議の労働組合、業者団体・農民連、新日本婦人の会、婦人民主クラブ，WWT（ワーキング・ウィメンズ・タマリバ）など女性団体、保育問題協議会、学童保育連絡協議会も含め多くの団体の力を結集して準備・開催されました

「第５５回はたらく女性の中央集会」に参加して

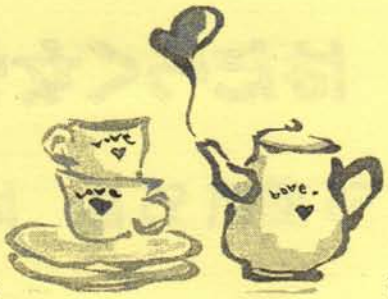
私は、“年金生活者”という立場であったが、WWT（ワーキング・ウィメンズ・タマリバ）の第５５回はたらく女性の中央集会県実行委員としてシンポジウムを担当させていただいた。第１回の実行委員会で“WWTって？”と聞かれ、知名度の低さと実行委員になってよいのかなと自問自答したものでした。

シンポジウム「扉を開く女性たちー仕事も自分も大切にー」は、コーディネターの今野弁護士＆男性を含むパネリスト４人の構成で100人の参加で開くことができた。（詳細はマスコミ報道や報告集を参照してください）約１年間の準備でしたが、正直私にとってはなかなか大変でしたが、同じ担当の現役の方たちと相談しながらシンポの準備を進められたのは楽しかった。その交流のなかで彼女たちの労働組合や女性部で抱えている問題を知ることができたが、なかなか先輩（？）としてよい話ができないなともどかしさも感じた。集会を終わって１ヵ月以上になるが、「はたらく女性の中央集会」のあり方を見直す時期にきているのではないかと感じている。のべ２１００人の参加はたしかに大成功であるが、今女性労働者たちの抱えている問題を少しでも糸をほぐすような集会ができないものでしょうか！！？シンポでも郵産労の非正規の闘いなどがだされたが、時間もなく、突っ込んだ話が聞けなかったのは残念でした。女性労働運動が元気になる集会にするためにも・渡辺泰子（会員）

■シリーズ職場訪問

私の職場のこと　　小島八重子(会員)

私の職場は、神奈川県商工労働局労働部技能振興・全国技能大会推進課である。全部言い切るには息がつまってしまう。この長い名前の由来は、「技能五輪全国大会」（23 歳以下の青年技能者が 39 職種で技能の日本一を競う大会で毎年開催）と「全国障害者技能競技大会」（障害者の自立と雇用の促進のために 22 種目で技を競う大会でほぼ毎年開催）の 2 つの全国大会を 2010 年に神奈川県で初めて開催するという、招致を今から 5 年前に知事が決めたことから、である。従来の手工業系の伝統的ものづくりの技術を伝承・発展させる技能振興の仕事（技能検定や技能者育成、技能者表彰、認定職業訓練校支援などが主たる業務）に、両大会の準備・実施が加わった。2010 年は、5 月に植樹祭、10 月に両大会、11 月に APEC と、神奈川県としてはイベントが続いた年だ。私は、今年定年を迎えたにも関わらず、この仕事を担当する羽目になっていたので、引き続きフルタイムの再任用として勤務している。この大会のお蔭で、神奈川県職労の専従執行委員の時並みに個人の生活も犠牲にするような、長時間過密労働に埋没することになってしまった。再任用職員で、こんなに働いた職員はいないのではないかと思う。せっかく、このような大会＝大イベントを経験できる幸運はないと、思い、どうせやるなら、何か残したい。少しでも「ものづくり」の振興、次代へ「ものづくり」の大切さを伝えたいと思い、仕事に向かって行った。選手や選手をささえる企業や団体の皆さんは、本当に損得抜きにこの大会に協力してくれた。多くの方々と語り合え、良好なお付き合いができた。しかし、心配なのは、県の今後の技能振興への関わり方の姿勢である。地味な仕事が大イベントで着目を浴びたが、終われば風船のようにしぼんでしまいかねない。すでに心配は現実に向かいつつある。独立したか課も来年度は元のさや、本課に納まることが予測されているからである。



技能五輪と女性

口上が長くなってしまったので、本題に移りたい。今回は 2 つの大会にかかわったが、技能五輪全国大会での女性の関わり方を、私なりに検証してみたい。技能五輪全国大会は、このかながわ大会で 48 回になる。ということは、かなり前から国が音頭を取り、主に中央職能協がその運営をしている。大会は毎年開催されているが、植樹祭や国民文化祭、国体のように各県の持ち回りではない。手を挙げた都道府県が開催することになっている。ちなみに再来年の 2012 年は長野県、2014 年は愛知県に決まっている。2 年ごとに国際大会が開催され、偶数年に開催される大会が、いわば国際大会の予選を兼ねる大会となっているため、各県は、盛り上がりを期待し、大会を誘致する方向がある。技能五輪大会と女性との関わりであるが、かなりの過去にさかのぼって検証するには時間がないので、過去 3 大会について考えてみたい。

女性職はサービス・ファッション系

技能五輪大会の競技職種は約 40 前後ある。かながわ大会では、機械系職種が 8（機械組立て、抜き型、精密機器組立て、機械製図、旋盤、フライス盤、木型、自動車工）、金属系職種が 5（構造物鉄工、電気溶接、自動車板金、曲げ板金、車体塗装）、電子技術系が 4（メカトロニクス、電子機器組立て、電工、工業電気設備）、建設・建築系が 9（タイル張り、配管、左官、家具、建具、建築大工、造園、冷凍技術、とび）、サービス・ファション系が 10（貴金属装身具、フラワー装飾、美容、理容、洋裁、洋菓子製造、西洋料理、和裁、日本料理、レストランサービス）、情報通信系が 3（ITPC ネットワー

クサーポト、ウエブデザイン、情報ネットワーク施工）となっている。競技職種は、技能検定職種がベースとなり、国際大会での採用職種が多くなっている。技能五輪に参加の条件は 23 歳以下の青年技能者になっている。参加状況をみると 2008 年大会では 953 名中 175 名が女性、2009 年大会では 983 名中 180 名が女性、2010 年大会では 1028 名中 163 名が女性となっている。職種中の女性の参加状況をみると 2008 年が 39 職種中 20 職種に、2009 年は 40 職種中 24 職種に、2010 年は 39 職種中 25 職種に女性が参加している。職種によって女性職、男性職という色分けはどうしてもある。女性職は、サービス・ファション系に集中している。2008 年、2009 年もかながわ大会とほぼ傾向は同じなので、その頃からを、かながわ大会でみていきたい。和裁は 31 名すべてが女性、洋裁も 20 名中 19 名が女性、フラワー装飾も 29 名中 28 名が女性、レストランサービスも 16 名中 12 名が女性である。男女比のほぼ互角なのは、美容の 39 名中 21 名が女性、ウエブデザインの 19 名中 11 名が女性となっている。機械系や金属系では、機械製図に 2 名、精密機器組立てに 1 名、電気溶接に 1 名、曲げ板金に 1 名、配管に 2 名、冷凍技術に 2 名、旋盤に 1 名、フライス盤に 1 名に女性がいる。建設・建築系では、家具に 2 名、建築大工に 3 名、造園に 5 名女性がいる。電子技術系では、電子機器組立てに 4 名女性がいる。サービスファション系の中でも男性が多い職種と思われる西洋料理に 22 名中 7 名が、日本料理に 56 人中 10 名が自女性となっている。

機械系・金属系・電子技術系などは、どうしても工業高校などを経て、大企業の中で訓練を受け、技術を磨き大会へ参加するという道筋があるので、女性の教育期間中も含めたライフステージの中で一生の職として選択していくことは、まだまだ難しいのではないかと思う。しかし、昔から比べれば職の壁は崩れつつあるのではないかともいえる。その中でもパソコンなどを使った電子機器組立てや機械製図は比較的女性がやりやすい職種になっていると思う。ガテン系の徒弟制度のつよい建築大工や造園、家具なども最近では女性が進出しやすい職種になってきている。一方、女性の職種といわれるものにも男性の参加が少しずつ目立ち始めている。フラワー装飾や洋裁などである。かながわ大会ではいなかったが和裁にも男性が参加している。

時間がないので、さっと見てしまったが、もっと過去を振り返ることも面白いかと思う。今回、大会を通じ大企業・中小企業・技能団体のみなさんとお付き合いする機会があったが、少なからず男性職に女性が参加してきている企業・団体さんは、職に関する男女の違いについては、あまり頓着していない。むしろ、職に向き合う姿勢を評価している。職を選択するきっかけをつかむには、職の魅力も重要なポイントである。小中高の教育を通じて、職に触れる機会をつくることが必要ではないかと思った。

インドの旅で考えたこと

貧しい女性たちの自立支援活動をする ーＳＥＷＡ（自営女性労働者協会）

近年にない暑い厚い日々が続く８月末、インドに友人がいるからという友人の誘いで、「インドの女性運動に触れたい、一度は行ってみたいインド」に出かけるチャンスを得た。ニューデリーに夕刻に到着し、友人宅に一晩お世話となり翌朝の７時半にはインド西部のグジャラード州のアーメダバードに到着。インドの最大の女性組織ＳＥＷＡ（自営女性協会）を訪問した。インドの労働者の９４％はインフォーマルセクターで働いている。そのうち60～70%が女性であり、女性の比率が高い理由は、常に二次的な地位しか与えられず、教育、技能訓練を受ける機会もかぎられており、全体的にレベルが低く抑えられているからである。ＳＥＷＡは、１９７２年にインフォーマル部

門（路上で物売り、露天商）に働く社会的弱者の女性たちのエンパワーメント（社会的・経済的・政治的・心理的な力を）を支援するために設立された組織である。１９２０年にマハトマ・ガンディーによって創立された、インドでもっとも古い最大規模の繊維労働組合を母体としている。繊維労働組合にいたイラベンがインフォーマルセクターのための労働組合が必要と気がつき、新しい労働組合として登録。現在はナショナルセンターとして９州にメンバーが拡大している。グジャラートに約５万人、ほか,デリー、ラジャスタン、ケーララなど。全部で約１５０万人の女性が参加している。

SEWAの概況

ＳＥＷＡ本部の社会保障部門を担当する　ミイッタルさんから、ＳＥＷＡ　の概況を聞いた。彼女の自己紹介では、もともと薬剤師としてＳＥＷＡに入った。20年活動している。今は労働組合の書記であると同時に社会保障部門をいかに充実させるか、サステナブルにするかが課題。ＳＥＷＡは労働運動と協同組合運動、女性運動を合わせた３つの要素を持つ運動体として、会員のためだけでなくインド全体のインフォーマルセクターで働く女性たちのために、アドボカシー活動や、他の女性団体への支援活動を重視している。その理念は、ガンジーの非暴力主義によっている。現在、労働組合としての職能グループは３５、協同組合は１００、農村の貧しい女性たちのためにＤＷＣＲＡ(農村地域の女性のための開発）グループは８０。支援事業にはＳＥＷＡ銀行による貯蓄と融資、保健ケア、保育ケア、住宅援助、就労自立支援、法的援助などある。貧しい女性たちを支援・激励しているのは、スタッフ全体の２割を占める高学歴の女性たちによる、研究・調査・データー収集などの活動である。私たちをコーデネイトしてくれた女性たちはいずれも、大学を出て留学し、英語など外国語が堪能な女性たちであった。直接のスタッフは、700人。99%は女性。18歳以上であれば、誰でも年間５ルピーの会費でＳＥＷＡの会員になれる。ここでは、ＳＥＷＡ組織の一部を紹介させていただく。

公営卸売り市場の協同組合の活動

旧市街の市営市場の一角に、ＳＥＷＡが権利を買って野菜の卸売店舗を営んでいた。１１年前から営業しているそうだ、市場を利用しているのは大抵が男性だが、ウシャ　さんとリナさんという二人の女性が販売に携わっている。ここの特徴は、男性の領域であった卸売に女性が参入したということである。最初はいろんないやがらせがあったりからかわれたりしたそうだ。農村から売りに来る女性もいれば、ここに買いに来る女性もいる。現在６５０人のＳＥＷＡメンバーとそれ以外の８５０人がここを利用している。４０キロ離れたケラ県の村から週３回ここにくるというおじさんに話を聞いた。奥さんがＳＥＷＡのメンバー。メリットはと聞いたところ、良い値段が付けられる、ローンを借りられる、保険に入れるということだった（すなわち後ろ２点についてはＳＥＷＡのメンバーになることのメリット）。ローンについては最初５００ルピーから初めて現在は２万ルピーのローンを借りているとのこと。店では１日３万から４万の取引がある。１００ルピーの取引のうち６ルピーが店の手数料になるので、店としては1日 180～200 ルピーの収入になる。

ＳＥＷＡ　デザインセンターの活動

100 年前くらいに作られたという古い家が事務所。まんなかに吹き抜けがあり光を風、をよく通す素敵な建物だ。デザインセンター以外にもゲストハウスなど合計ＳＥＷＡの３団体がここを使っている。リチャさん（デザイナーの有名な養成学校卒業、インドの伝統的なものを残したいという気持ちでこの仕事についたそうだ）

ここではパッチワーク、刺繍、ビーズなどの研修を無料で行っている。20年前に作られた。月に30人くらいが研修を受ける。この場所でやる場合もあれば、女性たちが集まっているところに出張して研修することもある。研修期間は刺繍は1か月、ビーズは15日、パッチワークは1か月くらい。卒業生の進路①自分で注文を取ってきて仕事する独立起業、②腕がよいとＳＥＷＡデザインで雇用し、製品を作ったり、研修の講師になったりする。③家内労働者のグループとしてここから出す注文を受けて生産する。現在製品は、ＳＥＷＡ カラカリテ（「クラフトの意味」お店）で販売しているがほかの所にも販路拡大する必要ある。今いろいろな展示会などにでて頑張っている。わたしたちも、カラカリテで日本へのお土産、サリーやショール、バックなど買い込んできました。

ムスリムの教育センター(寺子屋)の活動

こちらのコーデイネーター女性はムスリム、27、28年前からＳＥＷＡで働いている。2002年の宗教暴動のあとここ平和センターとして設置された。多くの女性たちが家族や仕事を失った。ここでは刺繍やミシンの訓練を行っている。日曜や祝日や休みで一日3時間、半年のコースで授業料は150ルピー。ここで研修を受けた後、女性たちは（ムスリムの女性が社会に出て働きに出ることは敬遠されている）家内労働者として働く人多い。また、この地域はヒンドゥーとムスリムの人口がほぼ拮抗していることもあり、宗教暴動以前から仲が悪かった。宗教の基本的知識を教える。たとえば今はラマダンだが、ヒンドゥー教徒の間でも断食があることを教える。宗教暴動は宗教そのものが原因だったのではなく、政治的な動機があったことを学ぶ。コミュニティに対しては異なる祭りを一緒に祝ったりするよう働きかけている。学校にいけない子供の教育などもここで行っている。

ＳＥＷＡが、労働運動と協同組合運動と女性運動をあわせた３つの合体運動と位置づけて、インド社会の低い地位にあり、社会から無視されてきた女性たちを、ＳＥＷＡのような媒体を通じて結びつき、インフォーマル・セクターの女性たちを行動することで「労働者」として認めさせていることの意味は大切である。そうした体験が彼女たちの心理的なエンパワーメントにもつながっている。日本でもワーキングプアの解消が課題になっている。何か考えられるものがあるのではないかと思いながら旅でした。（澤田幸子　会員）＊（このレポートはＣＡＷの広木道子さん、アジア経済研究所の村山真弓さんの論文を参照させていただきました）

「我が窮状」を歌った

そのチラシを見たのは夏頃だったろうか。「かながわ女性９条のつどい」の案内だった。

「何これ、嘘でしょう」と思った。チラシには沢田研二の名前があった。沢田研二（ジュリー）は私たち団塊の世代にとっては大スターだ。その内、真しやかに「あっという間にチケット完売」というニュースが流れて、９条の集いのことは忘れていた。１１月初め、友人から電話があった。「１０日の集い、券があるけど…」と。即参加と決まり、神奈川県民ホールへ向かった。１１月１０日、横浜みなとみらい地区ではアジア太平洋経済協力会議（ＡＰＥＣ）が始

まり、交通検問や封鎖のバリケード等厳戒態勢となっていた。タクシーの運転手が「県民ホールでも何かあるのですか」と話しかけてきた。９条のつどいはメジャーではないようだ。開演まで１時間以上あったが、ホール前には長い列が出来ていた。憲法９条を守ろうという熱い思い、ジュリーと歌いたいという思い、どちらも強かったのだろう。何だか、わくわくした。会場は満席、２５００人で埋まった。つどいの呼びかけ人のひとり小山内美江子さんが、沢田研二さんが出演することになったいきさつをユーモアたっぷりに語った。「沢田さんが横浜に住んでいることを知った事務局が、昨年６月に思い切って出演依頼の手紙を出した。駄目だろうなと思っていたら、ご本人から『行きますよ』と返事があり、『皆さんでコーラスしてくれますか』と言われた」。

それから１年かけて準備をし、バックコーラスの参加者は２５０人を超える大合唱団となった。まさに「ひょうたんから駒」。しかし、初めから無理だと諦めたら実現しなかった。サプライズだ。その上ＡＰＥＣ会場の近くで、全国の警官に守られて、何があっても怖くない。平和の集いが開催できるとは。　湯川れい子さんのお話、澤地久枝さんの登場と盛り上がって、

いよいよジュリーが舞台に上がった。「今日はひとりの神奈川県民として参加しました」と挨拶があると、大きな歓声と拍手が会場を包んだ。「我が窮状」の作詞は沢田研二、作曲は大野克夫、「窮状」は憲法９条を意味している。還暦を過ぎたジュリーは白髪が増え、お腹も出て、昔のイメージからはほど遠いが、のびやかな歌声は健在だった。熱唱だった。拍手が鳴りやまず、閉会を告げようとした野末悦子さんにブーイングが飛んだ。予定外のアンコールでは「皆さんも歌いましょう」と全員で合唱することになった。一斉に楽譜が開かれた。私は３階席だったので、一瞬白い花が咲いたような会場に感動した。自分の意思で、勇気を持ってつどいに参加してくれたジュリーに感謝の夜だった。
（池田資子　会員）

命を金儲けの対象にしないで！―高齢期問題

私が住んでいる町の、ある政党の住民アンケートでは、生活不安の第一番目に、高齢期の問題が上がっていました。高齢化社会の進展に対して公的な制度は充実どころか、普通に働いてきた労働者さえ制度を利用できないくらい金が掛かる状況に向かっており、このことが高齢者の生活不安の大きな要因になっていると思いました。私が高齢期問題に関心を強めたきっかけは、大企業が経営する介護付有料老人ホームの入居金を、何千万円も払うという新聞一面を使った広告を見て、腹立たしさが胸元に突き上げてきた時でした。何十年も

労働者をこき使って搾取しながら、老後のための労働者の蓄えをゴール地点で、財界は一挙に吸い上げようとしているとしか私には思えませんでした。４年前のことでした。

当時の私は介護保険料を取られていることを知っているだけで、制度の内容についてはまったく知りませんでした。突然倒れて介護状態になった自分の姿など、想像さえしていませんでした。「湘南高齢期ネットワーク」という組織を作って、地域の皆と活動を始めて私はたくさんのことを学びました。

第１に、「高齢者の住宅」として多くの人達が入居を希望している特別養護老人ホーム（略―特養）ですが、実際に入居している高齢者は介護度３、４、５の適用者で、私が見学した幾つかの特養の方々は皆車椅子の生活でした。費用は４人部屋で所得によりますが、安い方で１ヶ月１２万円位、１人部屋は１８万円位かかるということでした。多くの待機者の中には介護度３、４、５の適用者も相当いるわけですから、介護による疲労から介護者が病気になったり、鬱病になったりという話は頻繁に聞いています。

今政府の方針は、特養などに多くの金は出さない（つまり特養施設を作らない）、基本的に住み続けた家で人生を完結させるために民間企業の儲けを勘案しながら、自己負担による対策ばかりが進んでいます。実際、体が不自由になっても自宅で生活したいという要求が圧倒的に多いことは確かです。しかし、いずれにしても介護が必要になった時に金がなければどうしようもないという方向は、確実に介護難民を作り出すだろうと感じています。

第２に核家族化による高齢化社会を生きるというこの現実は、私達にとって人生を全うする新しい実験のようなものだと思うのです。今時、親も子どもも互いに面倒を見るなどという考えを持っている人は、まったく居ないといっても過言ではありません。そうなると親は頭がしっかりしている内に、高齢期の自分らしい生き方を考え、決めておくことが大切ではないでしょうか。もし、今まで住み続けてきた地域で最後まで過ごすというのであれば、地域のネットワーク作りは、大変な苦労は伴いますが欠かせないことなのです。視点を変えて働き続けてきたことによって得た知識を生かして、自分達の住宅を作るという発想も当然あります。この場合は自分の家を持つというより、住宅経営という観点でやらないと世代交代が上手くいかないだろうと、私の拙い経験から感じています。

人生を全うするということが付きまとうためでしょうか、高齢期問題に対して、多くの人は尻込みをしているように思えます。その間に財界、政府一体となって介護を金儲けの対象にして、対策が立てられているように私には見えてなりません。中年世代も含めて、やらねばいけないことだらけの私達の生活の中に、ぜひ高齢期問題をしっかり位置付けて、足を一歩踏み出して欲しいと願っています。（浅井優子　税理士・会員　）

12・21横井久美子さんといっしょに資生堂・アンフィニの仲間を励ます夕べ

資生堂工場と地続きともいえる鎌倉芸術館で、資生堂を相手に非正規切りの見本のような解雇に反対して、撤回を裁判で闘っている 7 人を励ます集会に 126 人が集まった。主催者挨拶に続いて、「映像で見る資生堂・アンフィニ争議」でこれまでの闘いをふりかえる。撤回させるには、今の日本の法律が企業に都合のよい抜け道だらけで、裁判でしか闘う道は無い、と弁護団が説明した。 続いて16日の裁判の傍聴、報告集会にも駆けつけてくれた横井久美子さんの応援ライブが始まった。子育てしながら働き続ける女性たちへの応援歌「自転車に乗って」。歌詞のフレーズにどっと笑いがおこり、「あ、そうそう、うちもそうだった」と共感が会場一杯にひろがった。予定していたプログラムを自在に組みかえ、7 曲を一気に歌いあげ、アンコールでは歌って愛して闘い続けようと、大合唱になった。

パートで働く女性の多い生協の仲間達からもエールを受け、7人の原告がそろってといいたいところ、ダブル・トリプルワークでこの場に参加できなかった3人の想いも込めて、4人が決意表明し拍手につつまれて集会が終わって外に出ると、土砂降りの雨。でも7人にとっても、働き続けたいすべての女性達にも、やまない雨はない、との思いを強くして、家路についた私達でした。（入船浩子会員）

神奈川県内の女性争議の裁判日程など

日産派遣裁判: 2月3日10:30(10時前に集合)
横浜地裁 資生堂・アンフニ裁判:2月17日10:30 横浜地裁

WWFK事務局からのおしらせ

新年会かねて「インドの女性」の講演会と交流会

2010 年も会員のみなさんには大変おせわになりました。年末には、第 3 次男女共同参画基本計画が決定され、民法改正など後退面も含まれ、実効あるものにしていくとりくみがまたれています。2011 年は、管内閣が「地方主権改革」とか言ってまたぞろ、自己責任論をふりまき、増税路線一筋で地方から国のありようをすっかり変えてしまう提案をしているなか、一斉地方選挙がおこなわれます。私たちはしっかり勉強し、「あまい言葉」に惑わされない選択ができるような取り組みをしたいものです。 新年会とかねて経済成長が中国と並んで著しいインドの女性たちのおはなしをCAW事務局長の広木道子さんから伺うことにしました。お忙しいと思いますが、少し気分を変えてお誘いあわせお越しください。おしい紅茶とインドのお菓子がお待ちしています。

新年会 「インドの女性たち」講演と交流

＊2011 年 1 月 25 日(火)18:30

＊横浜健康福祉総合センター(桜木町駅前)8 階A

■はたらく女性のフロア通信第７号
発行：はたらく女性のフロア
編集委員：池田資子／本間重子／渡辺泰子
発行日：2010 年 12 月 29 日
連絡先：横浜市中区桜木町３－９
平和と労働会館１階
電話／FAX０４５－２６３－８７３３
E-mail wwfk@sea.plala.or.jp